誹諧 植徒集 坤

六五五

百十五冊

へ5
6506

東京帝國大學圖書
尾陽雲林菴文庫
竹冷文庫

雫するおとで鼓路すよ時雨れ　手加 種丸

草菴

春待や柳ひと木を門のまへ　越ヶ谷 古臣表

晴天よ浅瀬わたる落葉かな　志一

嫁のきぬ落つゐ雪の家　交輝

池水に流れ枯ちらしけり　桂榮

菜あらふに志まりおつるや菜の煙　里雪

ヘ5
6506
0101860 22012

門松に風の落て日よりかな　梅山

落さまに風の見えたり蓑の羽子　敬黒

明る夜の笹に音して時雨けり　嘯月

北風に追して里も志ぐれけり　蒿堂

雪は夜の早う更るや町の鐘　東光

一しきは人來る戸口の志ぐれかな　与丸

ありて晴し山を見直す時雨かな　粕壁　淡月

山は火の細う見ゆるや冬は月　宇都の宮　梅二

月代を立志ぐれする夜さかな　其翼

客は下駄庵へ出して菜の花　塵外

吹降の中に行のるし枯尾花　梨長

簑振て又居つきけり雪の鷺　蘿竹

降音もやまぬ色につもる雪　子寄

居る宿の人も留主なり落し水　芦野　楓笑

芦野の柳

雨露の月日を経てちる柳　貞士

秋風や海へ出て行く強る雲　白川 佛孫
踏出し素足のあとや薄氷　清素
新盆や隣の垣に吊灯　對月
稲妻やひやくぬける竹の奥　風毛
錦添ふうち来て見せたるあきせかな　須賀川 たよ女
植よきかり落る日の照るもきかな　清民
紫蘇の実もともに白菊の花　素窓
伸過て下葉まじりや粉紙包　静友

石橋の名に通ふや木槿垣　雨石
鶏頭の中を通ふや秋の風　郡山 一仙
浅香新沼
水あせし沼やさびしく秋の風　貞士
とまりまでつひ打出し藤種かな　福原 一叢
よくみれば二つ有けり猿の声　米内
畏ひとつあまりけ見ゆる野分かな　三石
鉢うゑの数まかりや花かくし　豊水

静なる萩の明やうや手の露　方儀

稲妻は夜さくや縄手の草の上　杉田 英泉

荒壁に萩の葉ちる夜寒に　二本松 東里

志ら菊に移めかけたる日の影る　丁酉

坪竿に一節越し紫苑かれ　郁家

曲尺持手に花盛るや菊畑　梅井

出支度に門さく秋のあつさに　一旦

秋はまや花葉さくちる草かれ　西英

みだれても桔梗はさき出よ星迎　夷葉

新酒や一番船の人さわく　菊也

鴫立てふるはしく芦の花葉に　奥端

こみあふて宮みのぬけし十夜かな　文鶴

無駄葉も落なり秋の風　鳥光

氏神の祭りもすみて露時雨　つや女

うしろから傘にものいふ時雨哉　里家女

水仙を鉢に移して咲せたり　柳眉女

蕣や置ふあふ宵の露に咲　菊翠

鐘打ハ猶も松の声き時雨ふ　東暁

風向を見て出る野路の芒かな　埋山

稲里結をほころけや葉の色　呉川

みそさゞいおかおもなき枝うつり　夢来

小川に来る枝に木兎とまりけり　清谷

宿引をぬけて行也雁の声　洞水

湯に沁る音に咲く菊に色　影池

安達か原

黒塚やさもありき秋の風　貞士

あつ秋や人の見とける宵の月　士由

更る夜に団扇ちるか萩の声　福島　心趣

蕣や黒八雪にまきなきそら　大夢

罠かけの鐘を挋ひぬ九月尽　之平

遠山おとみちて見るや寮の窓　桂舟

塔まで並ぶ笛ちるや盆の月　素五

まつ蔭やちらりくと松の雲　東臺
時てかゝる横日ありし菊の花　守三
一あゆし来ていかや住居見る　素湖
月のある鷹狩さびし冬の柿　直樹
ちる葉に音して折れる桔梗かな　草居
時雨る家ありて雑ぶ群れむ　一英
名月や川を堺に素きよけ　素打　笑河
ふ納地のあさけに仲る芝うれ　四敎

垂柳や藤ふき焚家の道の口　杏園
蛙の声見えて更和十三夜　柳枝
耳よせて庭の竹くう西風かな　無財
そのぬけにちる縄まきあげ柳かな　澤水
日ぐらしの声は名残や一里塚　桃居
見ふ向てかしおしる杯の縁　松翠
阿武隈川まで
船底に水をむなしく流るなり　貞士

実方中将の記念の芒と聞て

植足してあまた流るゝ芒かな　貞士

朝空や芒穂にしみし温気の匂ひ　大川原 江三

庵ふくやいつら借る萩の成し　一雨

松影の火ともすやうな虫の声　加祢女

十露盤珠玉の露や秋の雨　三朝

咲ながら根に付して居る萩葉の色　角田 梅交

去り出る水ともひなし女郎花　楸ノ木 淑柳

葛とあれて吹きぬ一露への雨　仙台 心阿

朝日や萩に降りし雨けれ　禾月

七夕やさしらぬつる降の暁　白水

名月や子瀬をさしてふむけある　松紙

萩まかりやそよりの先にまく露　梅霞

秋風や志めりのぬるむ舟の綱　子良

稲妻や藻にかゝる舟社中　峯堂

川くしるかけ尾ぬけて其の月　菊画

松のこゑとり山はさみちこの秋　如風

連待て馬たゝせおく秋寒に　化雨

蓮澤の研前にて

すゞめのゝ皆空し秋の西　貞士

沖は焼のゝ宵を見えさ萩の花　素亮

かり近うすたま迄あり芒の穂　東霞

帰舎を写に秋の明る鶴に　通山

宵は寒き家ハなくもりぬ十三夜　蕙山

絶まあり水音あの秋の空色　継宜

吹きしめ露の明りや芋の上　知休

静さに戦き出したる芒かな　生ゝ女

神は焼のまゝある閑そ帰水鶴　柳人

蛙ひゞ瀬に萩は志なくる　筆好

寓心はきもまて叩ん遠きぬさ　如水

照清く星河暑のまゝ美り　雨華

湖にたゝるくもりや飛ちる　勝一良

一すみして梢見ゆる清水かな　文居
雁啼や霧のまゝに戻き峯　蕪蒋
粧ふて根にかへりけり草の露　湘立
月暈るも足あらためてる雁　新月

塩竈神社

手をつけぬ花や昔の霧に　貞士

松島旅泊

まつ島や遠き心の行ますま　左

入月や油売てぬるむしの声　くに女
初汐のよせてきたるや月の影　柳英
晴浪の夜にけふしそきかむ　塩竈 住帆
月出て障子をあけて燈籠に　石の巻 二品
吹まくや中真白く行ふ子　名取川 葉久
一もとつけて折まる礎の松　南部 平寿
そよ〳〵や不意ある倒る芦　黒羽 大塚
うしろから見られて路中に　如雪

稀蕉や女もすまる備へかひ　丁巳

手折らく枝をれ咲そ後の桜　其笙

足跡の連をもかく雪見かれ　浅耳

菜畑から峰立登於千曽この春　菜雄

水仙や霧に負けぬ花於形　桴木　道雄

埋火や鐘中度ま重る心　雲岳

山茶花や野社目の忘れ垣　竹雨

年をとる分判もなし暦かな　加清里

出て見れば峰まで雪に庵るに　葦湖

燈籠や町家並んでふたつかり　出羽　二丘

野堂や又掛て見る石燈籠　羽人

見返ればまた雲ちかく雁の来る　匡芝

散かりて見るき庭あり萩に月　左十

秋の来る方へと直き枕かれ　由丈

世かくも合ひ風なる枯野に　左陸奥　抱儀

ゆく秋やいつもきのふは岸の松　一止
月うけ細き表おろしの綱と(?)　流
店先は錦莚(?)とて箔(?)を並とめて　芝
象のとくさかりに通るを見る座(?)　止
咲初る芥子は一重まくらく(?)　止
た隠し(?)しきに鶴てなるし(?)　芝

雁をならべく文字を書ならひ　止
座敷に広げ(?)強気知也(?)　芝
逢よりも母の白髪を見てとり　止
炭の火を祢ぐる音もつきて紀(?)　芝
宵月ほそく見ゆる枯尾花　止
罠をはりのきて狐帰る夕(?)　芝
國を出て尾上(?)の鮫甲斐なし(?)　止
今ぞ恋しき加茂川の水　芝

あくさみて手深き白き人の来哉　北
雛の餅つく隣さへなく　芭
降まゝに心もとめぬ花くもり　北
出かはりもやめになりし峯の　芭
足てゆきても店屋請取ふ談合さ　ゝ
素建をこりはつかり出生を　北
きらひとも志ら須縁る鰌汁　芭
錺れ居らぬもふ名意と気にかゝつく　北

白れさせたよわき男ぞきもき紙　芭
伴ていきうれしゝあさのさ四五本　北
あかり先れ居ふ出て藤の船を覚し　芭
恨いまそきて志らぬふりも哉　北
何屋んと知ずし温泉来を行戻　芭
数あれ中にちらりと葬華　北
絵写常へなり上弦の影をきゝち　芭
ほとをまゝまれて　鉄角力場　北

子供等に拾ふて銭を分て遣す　芝

杖を忘れて目出度からぬ新ら　山

落縁の下に来る上子厳　芝

衆ちかつまむ肉庭はちさ　山

蜂の巣ちさ咲之花に隠れたり　芝

水はぬるみて青さらり川苔　山

文音之答

出嬉しき人のあつまりあまた世に　昇池

土手は若葉はちろよき風　勝錦

藍玉の売口あけて涼しさなし　流芝

暖簾むらんて牛を牽くも　池

舟は月まつのも雲り消えて　錦

萩乃花は飛くさく　芝

捨炭をしまぬ角力は逢ひきゝ　池
持よれやうを荷物さしらよ　鉾
手飼したる椋ちまる気とり言　芝
操はよき蕨葉は売　池
骨をしま世にたらく身子坊主　鉾
手入としのぬ薮は自然枯　芝
気はあける夜は月の晴くもり　池
蒲団気とつ身熟はなせておく　鉾

返事しはなる時は出手は晴二階　芝
からみあふたる常の店先　鉾
湖へさし出す花のさゝへ散　池
目鏡に新月に写し何らか　鉾
大勢が為きし絵を笑たまて　芝
日あし見たのも魚見たちまる　池
流れつく磯水に犬のむくと起　芝
まし出かまし　き下女の物いひ　池

産後ゟ居城の痛う岸よあり　池

満ちし西へまた載郷鳴　録

善前に素足で戻るあやめ売　芝

少てまきこむよるで恵く焼堂　池

村中へ戻り合ふまで鞠行菜　録

河骨ゟ清里までやる深紺　芝

七夕は笹にかゝりし肉細く　池

籠のゝけふて鶏をむし鈍　録

此頃も扇忘れて涼になり　池

加判役襟に羅小莫濃安　録

山繕を畑におこして縫ちしさ　芝

王川の本水を梳秋本のまて　池

志る飯にあやまく出家も武師　録

秋のきさ見しあとの渡の清く　芝

山城

時雨崖笠従ふ旅に契りたり　菅之

生垣や崖出て行室に穴　芳英

麦秋はつやまま葉も一むしろ　九起

絶蔓て這ひ行蝶や渋きふき　百篆

月影は家々八坂も在神路山　梅室

代りあふ雁に名別ち月見かな　鉄年

去年の火よよ志ハ晩ふ紅大経かな　孤柳

打水はいきまきめぐり桐一葉　鳥谷

釣竿もあつまる家は門葉かな　梅通

むしろ帆のおしあがりて風薫る　呉明

蜜や耳まで手かるさ聲に氣　有芸

つり羽子は下くり行魚蔭かな　枝月

摂津

涼しくしと冬も白し綱の内　其山

手利多け足洗き田植かな　禄白

まつ宵や芦の路を海みちて　素屋

あけ渡る一夜寝さむ明しに　淡叟

松のあらし風のさそふぬ牡丹に　白鵠

をしみけるあそびさあかる春の月　彩左

又もとし重なる往来や松の辞　林曹

とくとくと志して旅へしうちたちに　梔室

雲てらむ風に吹やみだるる月　松隣

播磨

梅もまだうれてやさし五月雨　可大

淡路

東風凪の秋のまつりや渡る雁　其秀

たゝ出る杖先咲や秋の風　咲枝

庭中へ影さす梅は月夜に　竹谷

羽子つくや上手な音に楽の揃る　希京

阿波

動く枝出来て萩咲るやあきかに　墨一更 松丈

咲を出川にさる蓮葉や杜若　源枝

柳まけてむよさゝ筏かな　万像

伊豫

石をおせは垣も動くや枯葎　映門

紅葉のちりきえ失ぬ衣かな　栄人

山鳥に尾をひく空のさのりけれ　鶯居

薩摩

まとして挑灯きえす空に中　甚松

うかれたふうちまくみなり山に月　波文

秋かせも登るもなく見相まやあるの空　山背

筑前

雪に山嶺きさりおもてさそ　縫之

まれ巣たて枝の出葉屋の笠かな　成雪

机にも春や師走の焚燒かな　沙童

請合に留主まかせぬ接木かな　甫旧

月に出ての風益見えるや冬の月　千江

近江

蕣には青くすゞき遠嶺の風　來有

鶯はみえぬやつき嬉し起しく　盧白

梅さかりちらして梅の月くらし　鴈山

降出して見失ひけり秋は蝶　芋丈

百合さかり花のまはり笠小笹原　楓下

伊勢

霞は音や若葉の風の上哉　流芳

ちる椿流れ細りて草は紅　つきを

鶯はさへずりと行年くれり　雀叟

焚つけの足らぬ鍋湯やむしの声　來白

田まはりてためらふ雪はかれ野　石斧

降初めてあと先くらし雪は原　梅曦

蕣咲て前髪まるやとより鶯　湛石

山茶花や舟付くまにあらまなる　いなる不

かくし葉たまく二葉之鉢の鳥　昌風

尾張

降るまでは雨めひまさる葎かな　庭知

持よりて買物売りけさの秋　芝石

蓑前に曇りはとまし日永かな　金進

葉かくれて蕣さかぬ軒の内　英山

何うけ来て雲の遠山や秋の空　旭章

鈴の音やさくらは雨よきらくの花　而后

咲てから蒼も見えそめ冬野梅　雨篁

あと白くまだ春風や梅の花　醉雨

出居より畳ちらきあつさかな　島津

身に通る白さしみりや花の露　有底

足る物よ日ざしまかるとんぼかな　一清

小さ家の春かな来てまた秋の秋　梅裡

飾りあて初雪見せて来りけり　桃旦

境内の古穴埋る二月かな　蓬陽

時雨るゝや好き掃除はあと廻し　我竟

種おろし日は静りなき高麗かり　李曠

清通りよ花も真りぬ梅林　楚江

信濃

かし人よ山に住むの清水かな　青坡

枯枝は見えぬさびしや飛鳥山　櫻平

さびしさや軒にゆるかて里の舟　可厚

甲斐

人分けて花駒の行く流みかれ　鋭葉

松のこゑかゝる風あり古都の春　可精

夕風や花のあとふむ芝は上　雲里

送られて来る人見えり春は中　草也

上野

夜寒もありきりまよふ山路かれ　西馬

満汐や木にゆらくと船の露　竹煙

相模

降る白み芽をきれてかへつけ　雨青

出す手を上手は志てまとりに　梅史
給ふるに家かねと嬉しくもさくらん　立宇
年あけり手摺のお手や古きしら　如之

下総

かき梅花は柳を姿まほり冬の梅　一照
井は花をつけ乍ら冬ぬ雪の宿　槐宇
降やめて月の出てあり雪は人　梅渓

加賀

吹降や名残は桜見て出行　柳壺
宿ともたた川を隣の春雪に　鶯呼
里ハたや岩の名あり松のうち　北山
似て地に白志ても牡丹かれ　年丈
梅まとり先に見ゆる春雪に　賀水
志ても里に花に飛や岩乃端　德年

能登

鶯は声けりや花に見えぬ声　呂風

越后

過し日を忘れしさまや春の雨　花了め

接木してちひさき心ならひけり　乙良

根に土をもつくりあけて蘇の墓　西疇

待町に網てふさかる彼岸かな　柳木

麻に足ハ数へられけり松の内　眉白

海川を出ぬけてあらし春の水　梧葉

宮ゝけに落らく月に霞かな　道雄

蓬来や月にさそかと戸を明る　馬梁

風筋に木の間出兼るあらしかな　菜山

船虹平精にきえむ柳かな　春宝

藪深く鶯なきぬ雨もよひ　春蛾

鶯に春の音よ時計なりけり　雅道

出羽

板橋の遠乃見出行きよみかな　擬月

晴過て雲まくらしきか桜　充園

名月やきらりと星の一つゝく　駿山
鮫屋鉤て蛤よくまはる夜の月　吟露
窓のうそ見えさし八溯し菜の花　松花
若竹や人えまよく垣をまもり色　縁峰
菜の花や菜種子採て多く崖　稲岁
四月から下枝のあとあり畑の梅　涼蕗
初雪の柴垣つくく小村かな　甚三
来る人を行燈向るおぬさ哉　古梁

鳴きよと持ちて八せなし小田の雁　古翠
早飯を定め夜より帰る鶴　一素
川もせも田舎にあらて梅の花　霞江
名月の夜をさそふぬ庵木か　大木

陸奥

木嵐の岩角たしかや花盛　雲才
竹むらや隣りの根のうつり穀　泉士
七草を仕めてや少し眠りなり　菜三

屋根裏に薄を出るとんぶ　宗古

水辺の暴風ゆるむの夜明かな　荻了

りに表や薄雲かる山に跡　句宣

掃退る古葉にあとや濱ゝ入る　含用

たゝ笄を秋の名残し松や初時雨　天遊

嵩桑の葉る世まて紅山飯や表に雪　波同

見覚にてむ這入るや椽の縁　碩水

傳ゝ紅色を出し雲ゝ抱き土筆　薑漏

蕣や末枯たまゝる錦法沙　幻分

秋らしく思ふ夜もあり夏の月　風阿

いふけするを道る情や花ちるぬ　石分

行秋を見たるかを芦に捲れ　渓良

時雨てや薪ほさたる枝の音　梅石

花蔭を見て来て畑も茄子紫　旦高

やゝ降に時雨ゝする枝の実に　葉瓢

なしよく雪ハ散りて軒の梅　流芝

帰るさに聞えし空で虫の声　清渕

水なるも笕に音のやせきて　阿うた

虹の織る手に志まる紅葉　似礼

ひそくと桔ハ玉こぼす月の露　之江

人さへ通らぬ浦のあきの浪　楳好

櫓の音に揺の音も滅る彼岸過　梔江

まゝ不自由なる声かな稚子　素音

こけなく頼らる色ある寂居さ　葉甲

火焼て出てこ川ともやく　光考

幕ハ雲いと花の鐘にかゝりけり　釿賀

日和よく遠く見ゆる伊豆山　路暁

あくさみに磁石とり出す舟の月　渕

碪打音か耳きそり青数　西

茎よりも根こそ風邪をまつ利て　礼
錺きしらへる足は笠用さ　三
驚な躍に舞こてもまきぬ忠墨　好
始まりて菓をえらむ棗つゝ　桃
旅人の刀おさへる夜講　蒼
蔦きりは家は實は畫の樣　甲
嗅ぎたか縁し竹さ嫁ときあひ　考
割ひ烟草に舌はなきなり　岩

冷りかね壁のそのてく夕なみ　暁
篭換りは中に鍛冶家く　芝
露こそけしきあと陽大板　角
柳とひもよしぬ宮は結操　游
名けあるは騎射の稽古の兼吹まき　三
あはまはものゝ水の波まゆく　礼
夕月にたえる庵あけしる土産物　桃
志きね枝より板の實をとく　好

籠城に退居して秋の風　甲

人はいさしらぬ癖にて知る　音

端銀まで集て巴る仲間せ里　賴

桐油に馬は尿をすべる　考

杏ちるとき里つ垣にしらぬ花　芝

植しわすれは墳無き　暁

武藏

おそしとも庵しめぬ薄は枝まで　玉英

晴てもの日和の空より秋の色　蘭之

睦ひと川越て消えり百は鴫　斎三

咲まえい川を並べて枇杷の花　先之

鶉の羽根のかたちは見ゆる錦まで　正价

降出せしまも朝日やかんて雪　嵐高

初花や出てきてうしろ壁隣　白水

かさを出る猿のこぼす木の葉かな　芝扇
咲そめて寒さも遠し梅の花　五八九
けさ秋も樹にへだて見えり子規　呉雪
門松のとれていつもの日ざしかな　源花

在府

物好も宿にあまりし夜半螢　阿波 風楼
夕暮やさそひもおそき風のそよ、　葉栞
国更て橋わたしさよ不如帰　出羽 ゝ孫よ

縄帯に杖は気楽や種瓢　尾州 素豫
短夜や露に伸ぶ草の丈　淡路 魚楽
木の雫ちらくや芭蕉の葉ばかみ　越后 鷺眠
さらし井にかゝる緑や一ツ家　下総 羽人
かんこ鳥高くや家遠くあちら向　駿河 互往
藤の花やおりしも汐はさしきぬる　上総 金波
舟程も早くもゆめのはる子観　下総 濱吉

春しきや袖のこほりは蝶の月　松秀

打水に庭はくらく蚊遣かな　左示

露ちる花や蜘の巣ちらす窓の錦　仙象

門田まで影さへ鶴の荘里に　旭洲

風葉する木草はあかりや日の出干　辮足

葱引て這入小家や梅は花　金令

年玉や姫様りしき色乃ちれ　風朗

水白く春風高き茅の輪かな　廷流

谷までに見ゆる御堂は梵火かな　萊静

尋ねきて芙蓉にまぬ花の宿　風外

むさき桂山は根まし子規　月窓

星は前男の春をあまりかな　呂岐

よろけて寂の庵きく夜中かな　逸潤

落つかで見ゆるや花の紅葉あり　東巨

売れた木と思ひぬ門の若葉かな　聴松

鮎ふかきる白山や窓は梅　嘉鳥

籠あけて秋の聲と来にけり　東子
家ゝに床あけて中やきりぎりす　松什
萩叢や根に咲初て地にこぼれ　伯意
落水に登る一つを沖の鮎かな　杜有
雲も秋の鶴は去る雲路かな　呂川
船に乗る日も哭けきと秋の風　五株
遠く中声は一二や夕川鳥　渓窩
萩叢に暮れ行風や落葉萩　尼樗

筆を育る竹は落葉の乱　丁知
寒は夜や家を送りて出て見　南枝
夕立や夜よりかたき石は月　言山
夜明けし小萩や花もまだまさる　葉須
君が代や何変はらで秋宮殿　枝玉
虫の中は露打ちらし秋の船　味舎
声なくとも見えるや扇のあち始め　小杓
雲は岸に手引きの光りけり　滑甚

藤の色を誘ふ風あり朧の月　米山

葉先まてこほしまりぬ梅の露　梅笠

音ふつて鳴きてぬるき清水かな　呉妹

夕月の落く影さそ蚊遣りかな　魯心

子規帰行門やさらし白　山外

菜大根の里を時得て梅の花　是外

まつ土地の人のみ通る柳かな　碩嶺

初午詣まかへるや波通里　湖十

菜花や庭にいろは川鏡　尾山

雲もなき鐘坊の香やあさき桜　素和

遠見まで一鐘つ鐘やあさき水　帷草

柚子味噌の念者さへや梅の花　宗卯

あつめてや夏こゝ梅新茶かな　湖山

初東風や魚ともなる火の見まかく迄　氷壺

旅人て鶉の籠は木の芽張し哉　由之

行さかの田まてつめたき清水哉　双

神風にとらるゝ人もなけ競馬　一具

夕虹や末は筋て帰る鷺　祖口

蝙蝠や御城の松に寄まほ　篤水

初春の中にも早し出路の墓　濱之

院ゝ斤明星へつきなり花の雪　其則

つゝしむ足を無き葉の木に残りけり　太祇

良ありて木の根を出る春の水　如等

宵過や門に蛍飛ぶ其の里　萬古

鳴に菜もあきし時雨や山のうけ　篤山

秋来ぬと露を結ぶの扇子てんれ　由埜

ちる花にうけく歩行桜かな　芦月

汲やせの松もふところや春の月　音人

買ふさまに花ちらしのおよたのつ舟　木子

寐過して麻直見なりこゝ日　呉木

恵方むけを横額かかる初日哉　貴友

五月雨やゆきて詠る早瀬り　寿化

待たる夜の短くもなし子規　素明

五月雨や去年て来たる藪の宿　稲鳩

涼さや手水鳴立る池の邊　在常陸 素明

草の葉の涼しく成し清水かな　菜明

ちりきりと蟻の足える青嵐　菜倣

心澄て流るゝものゝ水すゞし　菜樗

物いはで一日暮しこ夜かな　菜豊

船に居て見ゆる暑や陸の人　菜隠

山かげや水打まはす木下やみ　菜聴

味噌蔵の用心土やこぼれ稲　菜谷

夕風おもり秋ちかき門田かな　菜光

蝉啼や晴りてくる状つゝみ　菜湖

萩かりゆきて見えぬ雲居かな　鉄菜

誰か来しこ夜半の軒に萩一把　謝堂

闇もなき渡し越けり夕涼み　近住

萱艸をひけば根のある清水かな　素情

初午や出のみぬの戸立に鶯売　梅守

松風の吹さりて秋ち鮮の声　北賀

寝てまても心の動くをんなかな　有隣

家ぬけの菜や花なのもみゆる　近人

打水や椽先へ出もたちこ盆　野川

蜂新子を早ちるちり山寺塔　芳川

蘇きくや足跡つきし庭の石　つね女

笠とりし夜似合ふ鉢あふき　千代女

袷着て身かるくつの幕かな　茹泉

晴よる雲待遠きもとみ葉　荷風

青鷺や二里また遠き横渡し　蛍菓

伸過ぐ菜く咲きてかなかつる　樸蝶

行水のなりて舟さへ日永しの野　阿た
寛涼に一浪高し夜の月　以禮
飯の餅やむしき火ある臺所　三江
若葉さへ高不也の烟直き川　路暁
峰には山は雨ちる秋風か　桃江
降つく小雨や鶏のなく田　篁甲
川風に光ちる積る火取虫　先考

降るもあかあれば雪は空　有已
氷は置つる壁のまく更れ　静和
きりくし鳴や竈のともし細り　芳邑
雨乞の桜桃にしみちきれ　鈴賀
樹の花をうける檐の眼立かり　櫟好
舟時を砧やめかりましく守　素晋
葉のつゆ落の音や芙　楓　清淵

三秀園の菊畠をかりて

ちる枝をきりはらされ柳かな　玄子

埋み火やかくしもあへぬ声のひゞき　猿錦

萩の野ら方へゝさよ鵆千鳥かな　石舞

帰庵

捨さし後からぬ庵の火桶哉　流芝

松島記行乃一集ハまさしく大なる
曉臺翁の篤孤松原集にならひし
體裁あれ植継集と題す思ふに
鳥羽帝乃御時大内藏康光卿に
勅して松島へ千本の松植させ給ふに
よりて千松島と稱へしと云阿弥陀寺
勅使乃松と呼て二株の大樹あり里人

此松をもて證とせられしと松か雄嶋
とよみたる古歌もありけれハ天仁年前
より其名あらはれて其松島乃名もなく
植継せ給ひしはいかにも又武隈の
松ハ風のたよりにつけて千歳の記念を
失ふ常盤なる松なる植たる人ハいかさ
ゑまてハ比まかし一念に住すて芦野乃
十あまりき杆乃栗もわすれて杉て若木と

このはまゝり萬物ともに盛衰ありあるを
時乃流行ありさまハ蔦の松原にこの
記行をも植継せ道乃常盤なる人事を
示わし又其時をもしらすところ事
かく録らましし物まことにかゝらめ

弘化乙巳春

影池

應需

天嶺樵人書

富田藏書

X 百十五冊
久井